

---

# 月読み

海土龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月読み

### 【Nコード】

N6763D

### 【作者名】

海土龍

### 【あらすじ】

『蚩狩り』から数ヶ月後、中学3年生の秋。ゆずると直久、そして、数久たちの祖父が死んだ。九堂家当主を決めるその座に突如として現れたのは、ゆずるの実父と異母弟だった。

## 1. もうすぐ会いに行くよ(前書き)

『蛭狩り』(<http://ncode.syosetu.com/n6689d/>)の続編です。

## 1・もうすぐ会いに行くよ

「君、ゆずるだね?」

顔を上げると、知らない男が自分を見下ろしていた。

知らない男。　だが、一目で分かった。あいつだ。幼いゆずるは男を睨み付けた。

男は涼しい顔で立っている。

細い糸のような髪は明るい茶色。瞳は暗い茶色だが、光の差す角度によっては黄金色にも見えた。

スツとした鼻筋はやや日本人離れしており、唇は薄い。

男のくせに眉は細く長い。また、男のわりに身体の線も細く、スラリと背が高かった。

似ていた。自分に。

似ていると感じて、ますます嫌悪を感じた。

母親似だと言われたことなんて、生まれてこの方、一度もなかった。

父親の名を口にすることは、九堂家やその分家の間では禁忌に等しいため、皆は祖父に似ていると言ってくれた。

それは誇らしくもあったが、父親は祖父の若い頃と顔立ちがそっくり同じであり、要するに自分は父親似だということなのだ。

生まれて初めて出会った知らない男　父親に対抗しようと、ゆずるは立ち上がった。

尻に付いた土を払う。その間、一瞬でも父親から目を逸らさなかった。

「一緒に来るかい?」

「行かない」

「でも、苦しいだろう?」

「……」

言われた言葉の意味はすぐに理解できた。

苦しい。自我が芽生えた辺りから、胸を締め付けられるように苦しくなったのは事実だ。

投げ出したい。逃げたい、と思ったことも一度や二度ではない。

それは年を追うごとに限界に近くなっていた。

「もう苦しまなくてもいいんだよ？」

「誰のせいで！」

「君には可哀想なことをした。だから、君の代わりを用意したんだ」  
ゆずるは息を詰めた。父親は優しげに微笑んだが、嫌悪感が増すばかりだった。

自分に流れる血の半分が彼と同じなのだと思うと、自分自身さえ嫌いになりそうだ。

もうすぐ会いに行くよ。

彼はそう言い残して、ゆずるをポツンとその場に放り、去っていった。

瞼を開くと、夜中だと言うのに部屋の中は白く明るい。

電気などといった無粋な物の必要ない夜。青白い光を放つそれは煌々と、ゆずるの眠る部屋の奥まで明るさをもたらせていた。

ゆずるは掛け布団から這い出ると、腕を長く伸ばして襖を横に引いた。

闇の中にばかりと浮かぶ月。満月ではない。だが、わずかにしか欠けていない月だ。

薄灰色の雲が漂っていたが、それらがこの月を覆い隠すことはないだろう。

月がそれを許さない。寄せ付けない程の強い光を放っている。  
刺すような光だ。この世の異端を許すまいとしているかのような

強い光。

異端。妖狼の血を引き、その血が薄まる度に妖怪と交わり、もはや人ならざる者になってしまった己の一族は、異端そのものなのではないだろうか。

ゆずるは仰向けに寝転んだ。月が見えるように、頭だけは廊下に出し、躰は室内に残している状態である。腰から下には掛け布団が絡まるように掛かっている。

秋風が吹き抜けた。躰を冷やしたが、動こうという気にはなれなかった。

満月に近い時期は力が使えない。

正確に言えば、満月の日が近づくにつれて力は弱まり、満月で完全に無力となり、新月に向けて増していく。

満月は明日だろう。故に、今のゆずるにはマッチ棒を浮かせる程度の力しか持ち合わせていない。

日常生活の何から何まで、本来、人が持つはずのない力を使っているゆずるにとって、人としての力だけでやり抜かなければならないのが、億劫でならなかった。

月さえ細ければ、寝ながらの体勢で移動することさえできるのだ。簡単なことだ。わずかに躰を宙に浮かせればいい。そして、その躰を平行移動させ、思う場所で降ろせばいいだけのことなのだ。

ゆずるは瞼を閉ざした。このまま月の光に身を突き刺されながら眠るのもいいかもしれない。

木々が揺れた。辺りに意識を巡らせると、何者かがゆずるの顔を覗き込んだようだった。

それでもゆずるは目を開かない。何者であるかは察しが付いていた。

九堂家の周りには結界が張り巡らされており、悪しきモノは内に入れないようになっていた。

結界を通り抜けられるのは、やくだいもないモノたちばかりだ。瞼を開く程の価値もない。

もつとも、今のゆずるには、例え瞼を開いたところで、それらの姿は目には見えないだろう。

瞼を開くだけ無駄というものだ。

ゆずるの顔を覗き込んでいたそれは、見飽きたのか、蛙のように飛びながら去っていった。

しばらくすると、また何者かが近付いてきた。

サラリと布が擦れる音。女だろうと思ったのは、長い髪が風に揺れる気配がしたからだ。

彼女はゆずるの顔に己の顔を近付け、額に己の唇を触れさせる。瞼に。頬に。

そして、ようやく気が付き、飛び退くようにゆずるから離れた。

謀ったな。

響きのない声で彼女は言った。

次第に怒りが湧いてきたのだろう。懷からキラリと輝く物を取り出すと、大きく振り上げた。

ゆずるに振り下ろす。だが、ゆずるに痛みはない。

所詮、彼女たちはゆずるとは異なる次元の住人なのだ。

彼女が振り下ろすナイフは、ゆずるの軀をスカスカと突き通す。無意味な行為。

それでも、彼女はやめない。

ますます怒り狂って、鋭利なナイフをゆずるに突き立て、どうしてと問う。

どうして、貴方は女の性を持って生まれてきてしまったの？

彼女の怒りの原因は、どうやらゆずるが少女だったせいらしい。

その少年としか見えない外見に、騙されたと思ったのだろう。

ゆずるはジッと動かなかった。

性別を偽っているのは事実だった。生まれた時から、ずっと男子として生きてきた。

そして事実、多くの者たちは、ゆずるのことを男と誤っているだろう。

彼女の肩を何者かが叩いた。彼女は、ゆずるにナイフを突き立てるのをやめた。きっと彼女の仲間なのだろう。やはり女で、二人は似通った気を纏っている。

瞼を開かないまま、彼女たちの様子を探り、彼女たちが自分から離れていくのを感じた。

月の光の中に溶けて、消えていく。

月の精だったのかもしれない。

だが、どうでもいい。彼女たちが何者であるかは、今のゆずるにとって、どうでもいいことだった。

もはや、確かめようもないことでもある。

ザワザワと木々が騒いだ。

ハツとして、ゆずるは飛び起きた。

庭の片隅で、最初にゆずるの顔を覗き込んだ蛙のようなイキモノが、ケタケタ笑い声を上げた。

嫌な予感がする。

子ども程の大きさのそのイキモノは蹲ったまま、ゆずるを遠くから見つめている。だが、ゆずるからは、その姿は見えない。ただ、気配を感じるだけだ。

それが嗤う。

ケタケタケタ。

その時だった。廊下の向こうから数久が走ってきた。月の青白い光の中、数久の顔は血の気のないもののように見えた。

ゆずる、と小さく呟くように数久は言った。

「たった今、お祖父様が亡くなったよ」



## 2 悲しい未来なら、知らない方がいい

タンスの奥深くから黒い服を引っ張り出した姉　　鈴加を、直久は眉を顰めて見やった。

黒い服とは、喪服のことだ。

「はい。これ、あんたの」

「……」

押し付けられた喪服を渋々受け取り、頬を膨らませる。

「まだ、ジジイが死ぬとは限らないじゃんか」

「死ぬわよ。今夜」

きつぱりとした口調で鈴加は答える。その、情の欠片もない言い方に直久は声を荒げた。

「なんで、そんなこと分かるんだよっ！」

「なんでですって!？」

鈴加は哀れみを込めた眼で弟に振り返った。だが、すぐに瞳の色を曇らせる。

「あのね。私だってお祖父様には死んで欲しくないの。だけど、どうしようもないことなのよ、人の死ってやつはね。そして、私たち先見神社の者が未来を予知してしまうのも、仕方がないことよ」

「予知……したのか？」

「お父さんもお母さんも、私も……」

「数も？」

「口にはしないけど、きつとね。それに、今朝から先見の姿が見えないのよ。神社にもどこにも」

『先見』というのは、先見神社が神として崇める妖狼だ。

直久の目にはその姿は見えないが、神社の屋根で昼寝をしていたり、供物を食べたり飲んだりしているらしい。その妖狼が得意とする能力が予知であり、彼を崇める先見神社の者は揃って予知能力

に優れているというわけだ。

ただし、直久を抜かして……。

「たぶん、お祖父様のところにいるんだよ。お祖父様に契約を果たして貰うために」

「何を果たすって？」

ポツリと言ったのは、直久の双子の弟　数久で、暗く沈んだ顔を隠そうともせずに直久の隣に立っている。

その様子がまるで支えを求めているように見え、直久は数久に寄り添い肩に駄をもたれさせてやった。

「お祖父様が妖狼たちと何を約束したのかは知らないよ。でも、彼らを式神にする時に、何らかの報酬を約束したかもしれない。大伴泰成のように」

大伴泰成。平安時代に生きたという祖先の名前である。より強い力を求めて様々な鬼と契約し、その死後、彼の式神となった鬼たちは交わした契約に従い、彼の死体から思うままに己の欲する物をもぎ取り、去っていったという。

大伴泰成が亡くなった時、その瞬間にして、亡骸が髪の毛一本残さず消えてしまったとも言われている。

「ジジイも死体がないかも、ってことか？」

「曾お祖父様はなかったんだって」

数久は肯定もしなかったが否定もしなかった。先見たち妖狼8匹が祖父の死を待つて、その傍らに待機しているのかと思うと、虫酸が走った。

直久は先程よりずっと弱々しく鈴加に尋ねた。

「本当に今夜、ジジイ、死んじゃうのかよ……」

「ええ」

喪服を握り締める。横を見ると、数久はすでに喪服姿に着替えていた。

今頃、本家には直久たち両親から知らせを受けた親族たちが続々と集まっていることだろう。数久と同じように喪服を着て。

祖父はまだ生きているのに！

「俺はジジイが死んだら、着替えるよ」

「そう」

数久はもちろん、鈴加も直久に無理矢理着替えさせるようなことはしなかった。

もしかすると、二人も祖父の死の予知を信じがたく思っているのかもしれない。　だけど、彼らの予知が外れることはない。彼らが予知したことは、必ず起きる未来なのだ。

肉親の死を予知してしまったやるせなさは、直久には分からない。

否定したくとも、己の力の確かさは誰よりも自身の知るところなのだ。力なんてなくて良かったと、つくづく思う。

悲しい未来なら、知らない方がいい。その時がやって来るまで、信じていられるから。

双子が玄関を出ると、喪服姿の父親が車の運転席で二人を待っていた。

本家に行くのは、父親と双子たちだけだ。母親と鈴加は行かないなぜ、と数久に聞くと、数久は言い難いそうに、月が丸くなってきたからと答えた。

「力が使えない時は家に籠もっていた方が安全だから。特に、死に近い者の側に行くのは、とても危険なことなんだ。うちの一族の女性には力がない時でも、その力の器となる肉体は変わらず悪霊たちにとって最高の器だから」

軀を乗っ取られてしまう危険性を解く。　そして、数久は、おそらくゆずるも祖父の寝所から一番離れた部屋で籠もっているだろうと、言い加えた。

「本当は、ゆずるは別の場所に避難した方が良いんだ。死の臭いに引き寄せられて、いろんなモノが彷徨い込んでくるだろうから。本家には強い結界が張ってあるけれど、それも、お祖父様が亡くなってしまった時、どうなるのか分からない」

「結果がなくなるかも、つてこと？」

「なくなることはないけれど、弱まるだろうね。弱まったところを見計らつて、嫌なモノが入り込んでくるかも」

嫌なモノ……。

どんなものかは想像できないが、いかにも嫌そうに言つた数久を見て、相当嫌なものに違いないと直久は思う。

本家に着くと、やはり親族がずらりと集まつていた。だが、どこを捜してもその中に女性の姿はない。ゆずるもいない。男ばかりが数十人も同じ屋根の下にいるというのは、間違いなく、異常な事態が起こる前触れなのだろう。

九堂家の当主が死ぬ。

その息子は十数年前に勘当されており、孫が跡を継ぐことに決まつているが、その孫　ゆずるは、男子だけが相続を許された九堂家において、女子として生まれてきた身なのだ。

その事実を知る者はわずか。

分家の者たちが知れば、ゆずるを当主にすることは認められないと騒ぎ立てることは目に見えていた。

ゆずるの父親を捜すことになるかもしれない。

当主に勘当された身だが、その当主が死ねば無効だと言い出す者があるかもしれない。

ゆずるの父親　浩一は、ゆずるの母親との婚約が決められていた頃からすでに、別に想う女性がいて、それでも母親と結婚し、妻が子を身籠もつたと知るや否や、その女と行方をくらましてしまったという人物なのだ。

数久が嫌悪を込めて浩一のことを話すので、直久も彼に対して良い印象は持っていない。

そんな人物を無理矢理連れ戻して当主に据えるのはどうかと思うが、ゆずるがいつまでも性別を偽ってられるはずもない。いずれバレてしまうことだろう。

それは、ゆずるが当主の座を継ぐ前であつて欲しいと願つていた

が、祖父は今夜亡くなってしまうという。願いは叶わない。

女の身で8つの分家を従える九堂家の当主となるゆずるは、いたいどうなってしまうのだろうか？

もう、ラクになればいい。

願わずにはいられない。

ゆずるは女なんだ。本当は！

叫びたい。大声で。

だが、叫んでしまった後の、ゆずるの絶望に歪んだ顔を思い浮かべれば、直久に叫べるはずがなかった。

ゆずるは祖父から、いずれ九堂家の当主になれと言われ、男子として育てられたのだ。

当主になるために生きているようなもの。

それを奪うことは、死ねと言っているようなものだ。願わずにはいられないが、叫べるはずがなかった。

日が沈み、すっかり夜が更けている。

時折、誰かが何かを払い除けるような仕草をする他、人々に動きはない。

隣に座る数久は直久に擦り寄ってくるモノにも注意を払い、追いつめてくれる。

だが、それが何であるかは、誰も一切口にしなかった。疑問に思ふのは、それを見ることのできない直久だけだからだ。

ガタガタガタ。風が障子戸を叩く。はっと数久が息を呑み、ぎゅっと直久の腕を掴んだ。

「数？」

「来た」

「え？」

「……怖い」

数久が外にいる何かを怖がって、直久に身を寄せてくる。

外にいる何か……。

それはゆっくりと近付いて来、部屋の中に入ってきたという。

数久だけではなく、大の大人も皆、凍り付いたような表情になって、その動きを目で追っている。

皆の目線のおかげで、直久にもそれがどのように移動しているかが分かった。

庭から入ってきて、人々の前を過ぎると、隣の部屋である祖父の寝所にスツと入っていった。

「ご臨終です」

間もなく、医者が呟くように言葉を放った。

### 3・俺はいらないってことですか

淡々と作業が進められていく。笑みを浮かべる者はなかったが、涙を流す者もいなかった。

通夜ともなれば、いくら月が丸いからと言っても、来ないわけにはいかない。翌朝、母親と鈴加も本家にやって来た。一族の他の女たちも。

そうして、皆の前にゆずるが姿を現せたのは、昼を過ぎてからだ。った。

口を閉ざした。皆、一斉にゆずるを見やる。

ゆずるは和装だった。黒羽二重の染抜き五つ紋付きに羽織袴。

直久と数久は黒のスーツだが、父親や叔父たちはゆずる同様、黒羽二重の染抜き五つ紋付きに羽織袴を着ている。

ゆずるだけが特別なのだと思い知る。ゆずるは子ども扱いされないのだ、と。

ゆずるが上座に着くと、口を開く者があった。肉のない軀は枯れ枝を思わせる老人だ。

正月に本家に行くと、よく見る顔だが、いったい誰だったんだろうかと直久は眉を寄せる。

すると、隣に座る数久が、日暮らし神社の当主だと囁いた。

九堂家の分家は8つ。姓は『大伴』で、その8つの家は皆、神社を経営している。

先見、風通い、刀守り、火刈り、迷い土、黒水、鈴鳴り、日暮らし。

それらは神社名であると同時に、その神社に住まう妖狼の名前でもある。

九堂家当主は8匹の妖狼を式神とし、8つの家の当主の長となる。

九堂家の経営する神社は、朝霧神社といい、朝霧という名の妖狼の住処とされているが、実際には朝霧はここにはいない。その姿を見た者は、ここ数百年、一人としていないのだという。

日暮らし神社の当主だという老人は、ゆずるに向かって、ゆつくりとした動作で頭を下げると、ゆずるだけではなく、その場に知る者たち皆に聞こえるように言い放った。

「決めなければならぬことがあります」

空気が変わるのが分かった。

もつとも空気に色があるとしたら、だ。

ゆずるの座る席は、直久たちよりもずっと上座であり、遠い。

長方形の和室に勢揃いした一族。皆、上座の方を、固唾を呑んで見守っていた。

「九狼様が亡くなられて、結界が乱れています。新しい九狼が貼り直さなければなりません」

「この家の結界のことではありませんよ。裏の山の結界のことです」

老人の隣に座していた老婆が口を挟む。数久が言うには、鈴鳴り神社の者らしい。

「あの山だけは結界を貼り続けなければなりません。それが九狼の責務です」

承知していると言うように、ゆずるが頷いた。

「次代殿にそれができるといっているのであれば、我ら老人は次代殿を九狼と認めましょう」

隣で数久が息を詰めた。

『九狼』というのは、九堂家の当主の別称だ。

はるか昔、九堂家の始祖が9匹の妖狼を従え、『九狼の巫女』と呼ばれていたことが始まりだという。

老人達はゆずるの年若さを懸念している様子だったが、ゆずる以外にいないのだ。

九狼は九堂家の直系男子が継ぐことが決められている。ゆずるの



父親がいれば、彼こそが継ぐべきものだが、今、ゆずるしかない。

ゆずるしかないと思われている。

ゆずるが少女だと知っているのは、祖父母と実母、そして、直久の家族たちだけだ。

もしかしたら、他にも気付いている者がいるかもしれないが、事が事なので、気付いていない振りをしている。ゆずるは少女であつてはならないのだ。

ゆずるが九狼を継げないとなったら、そこで血は絶えてしまうから。

ゆずるしかない。

老人達が再び口を開こうとした時だった。何かが家の中に入ってきた。

何か 生ある者。そして、自分たちとごく近い者だ。

皆、互いの顔を見合わせた。一族は皆、この場に揃っている。

ならば、いったい何者がやって来たというのだろうか。

廊下が軋む。近付いてくる。カラリと障子戸が開くと、祖母が姿を現せた。

直久は息を吐く。

そう言えば、祖母は祖父の遺体を守って、この場にいなかった。だが、彼女ではない。何者かは、家の外からやって来たのだ。

祖母が部屋の中を見渡し、それから廊下に振り返った。

足音。一人ではない。子ども？

小さな足音がやや大きな足音に隠れるように響く。

祖母は障子戸を大きく横に開いた。

すー。

軽い音が響き、その人は現れた。空気が張りつめた。皆、息を呑み、その人を凝視した。

ガタン、と音が鳴り響き、硬直した皆の躰がようやく自由になったようだった。

直久が振り返ると、ゆずるは立ち上がり、困惑した表情をその人に向けていた。

「なぜ、貴方が……」

最初に口を開いたのは、ゆずるの実母、綾香だった。かつての夫、浩一を青ざめた顔で見上げた。

彼は薄く笑った。

「黒水から父さんが死んだことを聞いた」

「貴方は勘当された身ですのに……」

よくもこの家の敷地を跨げたものだと、彼女だけではなく、その場の空気が言っている。

浩一は薄い唇に淡い笑みを浮かべた。細い糸のような明るい茶色の髪。

伏せた瞳は茶色だが、顔を上げると黄金色に輝く。

ゆずるとよく似ていると、直久は思った。ゆずるの瞳も、ふとした時に黄金色に輝く。

綺麗だと思うが、同時に、やはり人以外の血がその身に混ざっているのだと思い知る瞬間だ。

「焼香しに来たというわけですか？」

浩一と眼が合い、ゆずるはグツと唇を噛み締めた。彼は微笑む。

「君を助けに来たんだよ、ゆずる。夢で伝えただろう？」

「夢で……」

「もうすぐ会いに行くと言っただろう？ 君の代わりを用意したから」

「代わり……？」

震える声で聞き返すと、浩一は微笑んだまま廊下に振り返った。

「太一」

子ども。7つくらいだろうか。呼ばれて、男の子がひょこりと顔を出した。

ゆずるの顔が凍り付く。一目で分かる。あまりにも似すぎている。あれはゆずるだ。幼かった頃の。

言葉を失っているゆずるに、浩一は目を細めた。

「この子が必要だろうと思って、君のために連れてきた」

「どういう意味……」

「この子は直系男子だ。君とは違って」

ざわめき。

直久の目に、思わず腰を上げる己の父親の姿が見えた。あの父親にしては珍しく慌てた様子だ。

「浩一！」

直久の父　彰久と浩一は従兄弟だ。互いに幼い頃は、今の数久とゆずるのような関係だったらしい。

その親しさを頼りに、諫めるような声を上げる。

「何を考えているんだっ」

「何って……。このままでは、あの子が可哀想じゃないか。あの子は女の子なのに」

「浩一！」

誰も口にしなかった真実を、サラリと口にして、涼しい顔をしている。

信じられないものを見るかのように、ゆずるは浩一を見上げた。

その顔は青白い。今にも倒れそうだと見て、直久はゆずるの元へ駆け寄った。数久も付いてくる。

二人でゆずるの腕を左右から掴んで、その身体を支えた。

「彰久、わたしはね。今更、この家に戻るつもりはないんだ」

「当然だ。帰りたいと言っても、お前を迎え入れる者など誰もいない。お前がした綾香への仕打ちは、何年経っても許せるわけがない」

「だけど、わたしがいなくなったおかげで、幸久の綾香への想いは報われたわけだし……」

「浩一、殴りたいのか？」

それ以上言うなど、彰久。

幸久は彼の弟であり、綾香が再婚した相手だ。ゆずるの異父妹である優香の実父でもある。

自分のおかげで幸久と綾香は結婚できたのだから、むしろ感謝して欲しいと言った浩一に、彰久は眉を吊り上げる。

浩一と綾香が従兄妹であると同時に、彰久と綾香も従兄妹であった。

幼い頃から共に育ち、妹のように思っていた綾香が、子どもを作るだけの道具として扱われ捨てられたとなれば、彰久に怒り以外の感情が湧くはずがなかった。それが例え、浩一だったとしても。

いや、むしろ、余計に強く怒りが湧くというもの。怒りに任せて、彰久は浩一の胸ぐらを掴み上げた。

だが、彼は涼しい顔を崩さなかった。彰久が何をそんなに起こっているのか分からない様子だ。

「わたしは義務を果たしに来たのに……」

「義務？」

「綾香が生んだ子が女の子だったと知って、これはマズイと思ったんだ。てつきり男の子が生まれたと思っていたから」

ゆずるの躰が小刻みに震える。

「家を継げと言われて連れ戻されなくなかったから、ゆずるの代わりを用意しなきゃと思ったよ。わたしには雪姫との生活が一番大切だからね。邪魔されたくない」

浩一はそう言って、太一の背を押しやった。小さな躰が一斉に多くの目に晒される。

雪姫。

直久が呟くと、数久が答えてくれる。

「浩一さんと一緒に逃げた人の名前だよ」

「……人じゃない」

震える声。振り向くと、ゆずるが頭をわずかに左右に振った。

「人じゃない。……鬼だ」

退治するべき鬼に心を奪われてしまったのだ、とゆずるは吐き捨てるように言い加えた。

それじゃあ、と直久は太一の方を見やった。ゆずるは頷く。

「あの人と鬼との間に生まれた子だ。                      忌々しいが、俺の異母弟  
というわけだ」

鬼の子。

細い糸のような髪に被われた頭に、もしかしたら角があるかもしれないと見やったが、それらしきものは見当たらなかった。普通の男の子に見える。

だけど、ゆずるの言葉を信じれば、鬼を母親に持つ子どもなのだ。

「鬼の子を九堂家当主に据えろと？」

「女を男と偽って当主に据えるより、よほど良い」

彰久が言っと、浩一は間を置かず言い返した。二人がゆずるに振り返る。つられるように、一族の老人たちもゆずるに振り返った。

「女……」

バレた、という思いよりも、誰もが目を背けていた真実を無理矢理見させられた気分だった。

場が寒々しく静まり返ってしまったことに気付き、浩一は場違いな素っ頓狂な声を上げた。

「まさか、本気で、ゆずるを当主にしようと？」

皆の顔を見渡して、呆れたように頭を左右に振る。

「この子は女の子なのに？    女の力が不安定だということを知らないわけではないだろうに。                      裏山の結界が消えてしまっても構わないってわけではないんだろう？」

答える者はなかった。一族の女達の力が月の満ち欠けに影響されることは、今更指摘されることではなかったからだ。

満月の夜、完全に力を失う。

それは、ゆずるも同様。女であるからだ。

九狼の務めが裏山の結界を保ち続けることであるのならば、月に一度力を失うゆずるには不可能なことだ。

分かっていた。それくらいのこと、指摘されなくとも容易に分か

ることだ。分かっていた！

それでも自分しかないのだと、ゆずるも、ゆずるを女だと知っている者達は思っていた。

代わりがいる。男の子が。

突然、それまで黙っていた祖母が太一の手を引き、上座の方へと移動してきた。

ゆずるの前まで来ると、太一の手を放す。そして、ゆっくりと、ゆずるに向かって頭を下げた。

「ゆずるさん、今までご苦労さまでした。これから先は貴方のお好きになさって下さい」

抑揚のない声。ゆずるは息を詰めた。数久も。返す言葉がない。

言い渡された言葉を、どのように扱ってよいものか、分からなかった。

ただ、分かること。それは、ゆずるに上座から降りると言っているということだ。そこに座るべき者はゆずるではなく、太一のだ、と。

「俺はいらないってことですか」

悲鳴のような声だった。血の気が引いた顔が一瞬にして朱色に変わる。

「ずっと、ずっと、九狼を継げと言ってきたのは、貴女なのに？」

お祖父様と貴女が、俺をこんな風に育てたのに！今更どうして言うんですか？ どうして……」

「ゆずるさん、何を怒っているのですか？」

祖母は淡く微笑んだ。

「これから男の振りをする必要はないのですよ。　　そうよ。買ってあげましょうね、貴方に似合う可愛らしいお着物を。その着物に似合うように、髪も長くのばしましょうね」

「お祖母様っ」

やめて欲しい、とゆずるは首を振ったが、彼女は続けた。

「貴方がそうしたいと言うのなら、綾香さんと一緒に暮らしてもいいのよ。やはり親子は一緒にいないといけないわ」

「俺に本家を出ていけと、おっしゃるのですか」  
絶望の色。

だったら、今までの自分の人生は何だったというのだ？

九堂家の当主になれと言われ続け、九狼に相応しい力を身に付ける努力をしてきた。

男にしか継げないものだと言うから、女を捨てたのに！

代わり？

代わりができたから、そんなにあつさり捨てられるのか。

「認めない」

気が付くと、そう、ゆずるは言葉を放っていた。

認めない。認められるわけがない。

どうして、いきなり現れた弟に、今まで時が来れば与えられるものだと思いきやなかったものを奪われなければならない？

欲しい、欲しくないの問題ではないのだ。

確かに、心のどこかで、いらな思っていたかもしれない。

だが、目の前のものを急に奪われたら、惜しくなるのが当然ではないだろうか。

なぜ、突然、現れた弟に？

それも、つい数分前まで、その存在さえ知らなかった弟だ。

幼い弟が憎いわけではない。憎む相手は他にいる。父だ。

捨てたくせに。母も自分も、この家も。

捨てたくせに、どうして今頃帰ってくるんだ。

なんで、今頃、弟だなんて！

今頃。

どうせ帰ってくるのなら、手放した時に自分が悔しいと思うようになる以前に帰ってきて欲しかった。

遅い。遅すぎるのだ。

悔しい。手放せない。

九狼となれと言われ育てられたのだ。他の何になれると言う？  
九狼しかねないのだ、自分は。それを取り上げないで欲しい。  
取り上げられたら、生きている意味がない。

グツと力を込められた。右を見れば直久が、左を見れば数久が、  
腕を支えてくれていた。

不意に席を立った者がいた。鈴加である。

「私も納得できません！　なぜ、女ではダメなんですか？　女が九  
狼になつてはいけないんですか？」

声を張り上げる鈴加の隣に、貴樹も立つ。

「九堂家の始祖、小夜も女性でした。ご存じの通り、最初となる九  
狼は女性だったのです」

そう言えばと息を呑んだのは右側の直久だけで、後の者は言われ  
るまでもないことだった。

小夜は泰成の子で、泰成が妖狼との間につくった娘だ。『九狼の  
巫女』と呼ばれていたのも彼女で、九狼家とその分家の始祖となる  
娘である。

九狼を継ぐことを許されるのは直系男子のみとされたのは、小夜  
の子らの代からで、以来千年以上それは守られている。

千年という長い年月守られてきたことは、始めとなる者が女だっ  
たからと言って、どうという問題ではなくなるらしい。長く守られ  
ていたものの方が大事となるのだ。

しらけた老人達の空気に、少年達は舌打ちをしなくなる。特に鈴  
加は今にも式神を放ちそうな表情をして、日暮らし神社の老人を睨  
んでいる。

「確かに、ゆずる君は女の子です。ですけど、九狼の第一の責務は、  
裏山の結界を保ち続けることだと言いましたよね？　それが可能で  
あれば、女でも九狼として認めてくださいますか？」

「女は無理だと、承知しているだろうに」

「小夜は可能でした。小夜にできたことですもの。ゆずる君にもで  
きるはずです。方法はあると思うのです！」



「方法とは。さて。そのようなものがあるのならば、聞かせて頂きたいものだね、先見神社のお嬢ちゃん」

老人は低く嗤う。

未だかつてのように嗤われたことのない鈴加は、きつく拳を握った。橙色に光る。小さな稲妻が拳の回りに走った。

「鈴加」

貴樹が鈴加の拳を上から抑えると、ジュツという音と共に焦げ臭さが辺りに漂った。

「お前は正しい。きっと方法はある。だから、抑えろっ」

老人から鈴加を背中中で隠しながら、貴樹は静かな口調で語り出した。

「九堂家の家系図を調べ、疑問に持った点があります。九堂家には代々、男子が必ず一人生まれているということです。必ず一人。二人でも三人でもなく。また、男子が生まれなかった代もない。これは確率的に奇跡としか言いようがないことです」

一代に一人だけの男子。

ゆずるの父には妹はあっても、兄弟はない。祖父もそうだ。姉妹はいても、兄弟はいない。

貴樹が言うには、過去千年どの世代を遡り調べても、ずっとそうなのだという。

もちろん、これは分家である大伴家には当てはまらない。本家である九堂家のみの話だ。

「これがどういふことなのか、自分なりに推測を立て、調べてみました。結論を言います。後継者争いを防ぐためです。先に生まれた男子は本家に残し、その弟は分家に養子に出していたのでしょう。ずっと不思議に思っていました。日暮らしの家には長い間、本家の血が混じっていないのに、なぜ貴方の発言力は強いのか、と」

貴樹は日暮らし神社の当主を真っ直ぐに見つめた。

「貴方は本家から日暮らしの家に養子に出されたのでしょうか？ 亡

き当主の弟だった。違いますか？」

否定の声はない。貴樹は言葉を続けた。

「逆に、本家に男子が生まれなかった場合のことも調べてみました。何人もの側室を持つていても、男子には恵まれないこともあるというのに、歴代の九堂家当主には本妻以外がいた例がない。それでも千年間、必ず男子が生まれているというのは、すごいしか言いようがない奇跡です」

男子が生まれなかった代もあつたはずだと言い切り、貴樹は一同を見渡した。

「男子に恵まれないと判断した時、最後に生まれた女子が男子として育てられる。そして、表向き嫁を娶ったことにし、婿を迎えたのでしょうか」

「推測だな」

「確かに推測です。ですが、裏付けもできません。一族の中、家系図に未婚と記されている多くの者は妖と婚姻したと言われている。その内の多くは子を儲け、その子を一族の者と婚姻を結ばせています。しかし、中には子がない者もいて、その者の従兄弟にあたる当主は決まって末子です。更に、その当主は従姉妹以外の者を妻にしています。このことから推測できることが何であるか、分かりますか？」

沈黙の中、つまり、と貴樹は言葉を放った。

「本家に男子が恵まれず、女子ばかりが誕生した場合、その姉妹の中、末の子どもが男子として育てられたのです。そう、ゆずるのうちに。そして、従兄弟にあたる人物を婿に迎えたということですよ。ただし、男子として育てられた者が婿を迎えるわけにはいかなないので、表向きは嫁とし、系図上では名前も女子の名で記されたのです。九狼は男子ではなければならないというものと同じくらい、当主は従姉妹を妻にしなければならないということは固く守られてきたことですよね？ 従姉妹以外の女性が当主の妻になっている記録があつたので、おかしいと調べて気が付いたことです」

当主が末子であること。その当主が娶った女性は従姉妹ではない。そして、その当主の従兄弟には未婚者がいる。

一例ならば偶然で片付けられる範囲だ。だが、数例もあることなのだと言った。

「過去に女性で九狼になった者の前例があるのであれば、ゆずるが九狼になることに問題はないはずです。また、小夜が女性だったことを考えれば、九狼が男性でなければならぬ理由が何であるのか疑わしいです。俺は、いずれ刀守りの家を継ぐ者として、ゆず

るが女の身で九堂家の当主になることに、不都合があるとは思えません。彼女が小夜と同じように裏山の結界を保てると言っているのであれば、当主としての彼女を否定する要素はないと思います」

ゴクリと直久の咽が鳴る。

貴樹が普段寡黙に見えるのは、おそらく鈴加がうるさいからなのだろう。鈴加が騒ぐから、貴樹は彼女を止める側になり、口を開く余裕がない。本来ならば、言う時は言う彼なのだ。

日暮らし神社の老人がギロリとゆずるを見、貴樹を見やった。

「小夜と同じようにとは？」

「我ら年寄りを納得させられるだけのことをして頂きたいものです」  
「そうでなければ、安心して死ぬこともできませんからねえ」

鈴鳴り神社と迷い土神社の老婆も口を揃えた。貴樹はゆずるを振り返った。

無言で数秒目を合わせ、再び老人達に振り向く。

「朝霧は他の8匹の妖狼の力すべてを足しても尚、それ以上の力を持つていて、古い書物で読んだことがあります。そして、過去に彼を式神にできたのは小夜だけだ、と」  
「なるほど」

老人達は浅く頷いた。

「小夜以外の主を認めず、裏山のどこかに籠もってしまったという妖狼 朝霧。千年来、その姿を見た者はないと言われている朝霧を式とした際には認めずにはおられまいな」

「時間がない。できるとあれば、今夜中に」

「そう、今夜中に朝霧を従えることができるのであれば、我らは認めよう」

できるはずがないと、その口調が言っていた。貴樹はゆずるに振り返ることなく、言い放つ。

「できるだろ、ゆずる？」

4つ年上の貴樹の背は、頼もしいくらいに大きく見える。おそらく貴樹は、この話を始めた最初から、ゆずるの力を信頼すると決意していたのだろう。

だから、振り向きもしない。

信じて疑わないのだ。ゆずるならでき、と。

きつと彼は、ゆずる以外の九狼は絶対に認めないだろう。

できないなんて言えない。否。できない自分なんて認められない。

「できる」

ゆずるは双子たちの手を払って己自身の力で立つと、きつぱりと言い放った。

どよめき。

老人達は嘲笑と頷きをゆずるに返したが、双子たちの親世代は動揺を露わにした。

「しかし、今の君には力がほとんど使えないのではないのかね？今夜が満月だろう？」

「昼間のうちは、わずかですが、使えます！」

「裏山に行かねば朝霧には会えまい。だが、裏山にいるのは朝霧だけではないぞ」

「確か、次代殿は5匹の妖狼を式にしているとお聞きしました。他の3匹のことも忘れてはなりませんよ」

「日暮らし、鈴鳴り、黒水、そして、朝霧。この4匹の妖狼を今夜中になど、不可能だ。おやめなさい」

「不可能でもやります。いえ、不可能かどうかなど、やって見もし

ない内には決められません！」

「下手をすれば命を落とすことになるぞ」

「構いませんっ」

どちらにせよ。九狼を継げないとなれば、死んだようなものだ。

だが、首を横に振られる。双子達の父親である彰久の首だった。

「母親を悲しませるようなことを言うものではないよ。それに、本家の血筋を失うのは我々にとって惜しいことだ。君を死なせるわけにはいかない」

直久、と彼は息子に振り向いた。

「お前も行け」

「はあ！？」

素っ頓狂な声を上げた息子を横目に、彼は一族を見渡して言葉を続けた。

「すでにご存じでしょうが、この息子は我が一族らしい力を何一つ持っていない。満月の夜の女たち同様に無力です。ですが、一つだけできることには、これはこれの双子の弟と繋がっているということです」

「うわっ。ちょっと待て。嫌な予感がすんだけどっ！」

「これを傷付ければ、弟の方にも同じように傷が付くという術をかけられます。よって、次代がどのような状況にあるのか知る手段になります」

「また、それかーっ」

叫んだ兄に、弟は大きく頷いた。

「春に僕が、優香ちゃんのお友達が眠ったまま目覚めないという事件を解決した時に使った術だね。さすが、お父さん！ 直ちゃんの使い方をちゃんと知っているね」

「無力な息子を持つと、あれこれ考えてしまうものだからな」

「そうだよ。無力な兄を持つと、ホント考えちゃうよ」

「おい、コラ！ その親子！！」

大声を上げる長男は横に置いておいて、なるほどと母親と長女も

頷き出す。

「直ちゃんなら、ゆずる君に手を貸したのではないかと疑いをかけられることもないのよね」

「数久ともツーカーだし。無能だけど、使い道はあるわけね」

そういうわけだから、と彰久はゆずるに振り返る。

「使ってくれるかな、これを」

と、直久をゆずるの方へ押しやった。

トンツと、直久の躰がゆずるに軽くぶつかる。

いらないういにかけて、ゆずるは口を閉ざした。触れ合った部分がやたら熱かった。

「直を連れて行くことが条件だ。でなければ、わたしは君を裏山に行かせることはできない」

いつか彼の息子も同じようなことを言っていたなと、ゆずるは眉を寄せた。

数久が父親似ならば、その父親は数久同様自身が一度言った言葉を覆したりはしないだろう。

何だかんだ言って、ゆずるは口で数久に勝ったことがないように思うのだ。彰久には更に勝てないような気がする。

ゆずるは両手を直久の胸について躰を離すと、彰久を見上げ頷いた。

「分かりました。直を連れて行きます」

「危険を感じたら、遠慮無く直をぶん殴ってくれて構わないからね。数が痛みを感じたら、わたしがすぐに駆け付けよう」

瞬間移動で、と彰久は微笑む。

「とにかく無事に帰ってきて欲しい。無理はしない。分かったね？」  
ゆずるは頷いたが、何が起きても直久を殴るようなことはしないと心に決めた。

もしもそうなった時。その時は、自分から九狼を継ぐ権利を失われた時だ。

必ず無事に戻ってくる。朝霧を従えて、必ず。

#### 4・人ではあり得ない力を持ちながら

違和感が走り去っていった。

「直ちゃん。くれぐれもゆずること、気を付けてあげてね」

必要以上に心配されることを嫌うゆずるの耳には届かないように小声で、数久は言う。

てか、ちいつとは、俺のことも心配しろってんだ。

直久が頬を膨らませると、直久の心を読んだのか、数久は目を細めて笑った。

「直ちゃんも気を付けてね」

付属的な言い方だ。だが、綺麗に微笑んだ数久に満足させられて、直久は文句を言おうとした口を閉ざした。

朝霧神社は小高い丘の上に建てられているが、その社の裏には、更に上り階段がある。途方もなく長い階段は、山へと続いている。

山の中腹に黒い鳥居があり、山の頂上に小さな社がある。その社が、朝霧が籠もっていると言われている社だ。

ゆずるは喪服から狩衣に着替えている。

直久もＴシャツにジーンズというラフな格好に着替えたが、数久に半袖はやめた方がいいと言われ、長袖に着替え直した。更に、上着を持たされる。

夏が終わり、秋という季節だが、まだまだ気温が高い。遠くの方で蝉の声がするくらいだ。

暑がりな直久にとって今は、分厚い布地の上着が視界に入ってくることさえ嫌なことだった。

どうしても言った相手が、もしも数久でなかったら、絶対に持つてはいかない！

そうして、どうしても言った数久を恨みたくなりながら、ゆずるの後を追って、階段の一步目を踏みだした。

ちらりと後ろを振り返る。数久や鈴加、両親。貴樹。親族たちが自分たち二人を見送っている。

ゆずるの背に目を戻した。ゆずるは黙々と階段を上っていた。再び後ろを振り返った。先程よりも数久の姿が小さい。次第に、その表情は判断できなくなっていた。

ゆずるの背。肩で息をし、前屈みになっている。

運動などとは縁遠いゆずるは、体力という言葉とも縁遠い。

特に力が弱まっているこの時期のゆずるは、己の腕を持ち上げることに疲労を感じるのだという。

フラフラと足下が危うい。だが、助けてやるわけにはいかなかった。そういう約束を親族達とさせられている。

直久はあくまでもゆずるの状態を皆に知らせるだけの存在であり、直久がゆずるに手を貸した時点で、ゆずるは九狼となる権利が失われるのだ。

後ろを振り返る。数久が遠い。だが、まだ年寄り達の目は鋭く光っていた。

ついに数久の姿が見えなくなった。辺りを見渡す。木しかない。後ろを見下ろすと、街が一望できた。

かなり高いところまで上ってきている。

石段は最初の頃に比べると、横幅が狭くなっていた。ずっと下の方では、数人が横並びになって上っても肩をぶつけることない幅があったはずだ。だが、今は二人並ぶことさえできない。

両手を伸ばせばすぐそこに木の幹がある。太い松の木が階段のすぐ脇を、それらの隙間から、やはり太い杉の木が見え隠れしている。

更にその奥を見ようと眉を顰めたが、壁のように木々が生えている様子しか見えなかった。

石段が終わった。踏み固められた土の階段が数段続き、やがて、それも終わった。

松の並びも終わり、代わりに人一人がようやく歩ける程度の道が



現れた。道の両脇には、膝の高さまである先の鋭い草がずっと続いている。

草の奥は木である。仰いだが、空は見えない。目に入ってくるのは、深緑ばかりだ。

細い道をいくらか歩き進むと、黒い鳥居が見えてきた。大人が一人くぐり通れる程の鳥居で、木で造られていたが、漆が塗られているため、テカテカと輝いて見えた。

「ここから先は、妖がうようよしている」

ゆずるが言うには、鳥居の先からはいよいよ結界の中なのだという。覚悟はいいなど、ゆずるが直久に振り返った。直久に言っているというよりも、ゆずるは自分自身に尋ねているようだった。

おそらくゆずるの問いには答えないゆずる自身に代わって、直久は力強く頷いてやった。

ゆずるが鳥居をくぐる。追って、直久もくぐった。

その時。ズンッ、と空気が変わるのを感じた。

重い。それに、寒い。

直久は腕に巻き付けるようにして持っていた上着を羽織った。数久に感謝しなければならぬ。まるで氷水の中に落とされたような寒さだ。

寒い。

ゆずるを見やった。息が白い。ゆずるも寒さを感じているのだ。

蝉の声が聞こえない。他の虫たちの声も。鳥も。

風が感じられないせいか、空気がひどく淀んでいるようだ。

木々のざわめきさえ聞こえない。

「行こう」

白い息が吐き出される。再び頷いて、直久はゆずるの後を追った。

また、違和感だ。

正体は不明。胸騒ぎだけがする。

道が二つに分かれている。一方は北へ、一方は西へと続いている。

北へ続く道は緩やかな上りで、西へ続く道は下っているようだ。

ゆずるは足を止め、北を、そして西を見やった。

「どっちに行くんだ？」

「あっちだ」

西の道を指し示す。

「頂上を目指さないといけないんじゃないのか？ 下り坂になって  
いるぞ」

「一度下って、再び上りになる。北へ行く道は初めこそ上りだが、  
すぐに下りの道になって、山から出てしまうんだ」

「そうなんだ？」

「うん。そうとは知らない一族以外の者が頂上を目指しても辿り着  
けないように」

他にも様々な仕掛けがある裏には、普通の人間が山に潜り込んで  
くることはよくあることだからだという。だが、普通の人間が入っ  
て、無事に帰ってこられるような山ではないのだ。

気が付くことができたなら、もちろん助けに行く。気が付かなかっ  
た場合、ようやく気が付いた時には、もう骨も残っていない。

「結界で封じているのに、人間の方から妖に近付いてくるわけだか  
ら、どうしようもない」

人知れず妖に喰われてしまった人間を哀れだと思いが、愚かだと  
も思うと、ゆずるは言った。

そもそも人様の領地に勝手に踏み入ってくる人間の方が、どう考  
えても悪いとも言つ。

確かに、そうだ。だが、自然のままに放置されている山に興味を  
示す者もいるだろうし、冒険に憧れを持つ若者がいかにも怪しげな  
山に興味を持つこともあるだろう。

どんなに防いでも、山の侵入者は数年に一度の割合で現れるのだ  
という。

「けど」

直久はゆずるの背を見やって、言葉を放った。

「なんで封じているんだ？ 霊を除霊するみたいに、妖怪とかも倒すこともできるんだろう？」

「……」

できないと即答しないあたり、できることなのだろう。ただ、『倒す』という言葉には語弊があるようだった。以前、数久に説明して貰った『除霊』という行為は、霊という存在を消滅させるわけではなく、時空の穴をあけて、霊界に送り返すことだという。

現世の、この世界、この空間、この時限から、霊という本来いることを許されていないモノを取り除くことを、数久たちは『除霊』と言っているのだ。

そんなら、妖怪相手は『除妖』って言うのかなあ。

除霊と同じ原理で妖怪をも倒すというのなら、彼らは、妖怪が本来いるべき世界に送り返す行為を『倒す』と言っているのだろう。

そういう世界があるのなら、この世界に『封じる』ことで留めて置かずに、返してやればいいものを。

そう直久が言うと、ゆずるは顔を曇らせた。

「確かに、妖魔界に送ることもできる。 だけど、しない。 できないんだ」

「しない？ できない？」

「できないんだよ。 彼らは俺たちの家族だから」

えっ、と直久はゆずるの顔を見やった。感情を読み取ることはできなかつた。

ゆずるは淡々とした言葉を続けた。

「俺たちの人間だけど、人間よりも妖に近い。 長い年月、妖と混ざり合ってきたからだ。 人間と妖の子を、『半妖』というのなら、俺たちは半妖よりも妖に近い存在。 お前は妖の姿をその目で見たことがないから知らないだろうけれど、妖は人と似た姿をしたものばかりではないんだ。 恐ろしく醜いモノもいる。 それら妖の血が濃く出てしまった子が時々一族の中に誕生する」

それら子がどうなってしまうのか想像できるかと、ゆずるは直久

に振り返った。

人とは似ても似付かぬ姿をした妖の血を受け継いでしまった子。その容姿は、もはや人間とは言えないようなものなのだろう。

「6年ほど前、耳まで口が裂け、尾を生やした子どもが誕生した。その子は生まれたばかりだというのに、黄金色の目を見開き、大人達の言葉を理解しているようだった。だから、俺はその子に言ったんだ。裏山で生き抜け、と」

何の話だと、直久はゆずるを見返した。ゆずるはふっと目を逸らした。再び歩み出す。

「その子は双子として生まれたんだ。そして、その子の妹が優香だよ」

「優香？」

ゆずるの異父妹だ。優香が双子だったなんて、初耳である。

「俺たちの祖母は、イタチの妖怪を父親に持つ人だ。おそらく、その血がその子に強く出てしまったんだろう。そう思い、思い出してみれば、イタチの尾のようだった」

わずかに微笑んで、ゆずるは言う。だが、すぐに真顔に戻って続けた。

「妖の姿でしか生きられないモノを、人として育てることはできない。俺はその子をこの山に連れてくると、さっきの言葉を言ったんだ。ここで生き抜け、と」

「一人で？ 生き抜けて、一人で、つてことか？ それってさ、山に捨てたつてことじゃないのか？ しかも、生まれたばかりの赤ん坊だったんだろう？」

「そうだ。生まれたばかりの子を、周囲のその存在を知られる前に捨てた」

「……」

可哀想なことを、と言いそうになった。だけど、ゆずるの悲痛そうな顔を見て、口を閉ざした。

「この山にいる妖は皆、その子のように、ここで生きると言われた

一族の者たちなんだ。家族のようなものなんだよ。倒せるわけがない。ただ、ここで、この結界の中で人間達から隔離し、また彼らから守るしかないんだ」

「え？ 人間から守る？ 人間を守るんじゃないくて？」

「同じことだ。同胞を殺されて憎しみを抱かない者はない。人が妖に殺されれば、人は妖を憎み、妖を殺しにやってくるだろう。人が妖を殺せば、今度は妖が人を憎む。それに、この山の妖が害を加えられれば、俺たち一族は人から去るだろう。ここの妖は俺たちの一族だし、俺たちは人より妖に近い存在だから、当然だ。だから、結界が必要なんだ」

九狼の最大の役割は裏山の結界を保ち続けること。それは一族が人間世界に居続けられるかどうかに関わっているのだ。

人ではあり得ない力を持ちながら、いや、持っているからこそ、人でありたいと願っているのだ。

わずかに窪んだ地面に足を取られ、ゆずるがよろけた。抱き留める。

どこかに老人達の目があるのではないかと、一瞬、嫌な汗を流したが、この様子を老人達が見ているわけがなく、第一にこのくらいのことで手を貸した貸さないの問題になるわけがなかった。

「大丈夫かよ？」

女扱いしたり、必要以上に気遣ったりすると怒り出すので、直久はすぐに手を放した。

ゆずるは言葉なく頷いた。何事もなかったように話を進める。

「優香はもう数ヶ月経つと7歳になる。一族の者は7歳になると、この山に一人で入るんだ」

「そういえば、そんな話、聞いたことあるな」

確か、山に入って最初に出会った妖を式神にするのだ。

「偶然出会うわけではない。妖の方が山に入ってきた者を見て、選ぶんだ。だから、おそらく、優香は会っただろうさ。自分の双子の兄に。そして、彼を式にするんだ」

「自分の兄を？」

「彼がそれを望む。この山から出たいのならば、誰かの式にならないければならない。だったら、最初の主は自分の兄弟を、と思うものが多いらしい」

「最初の……って」

「妖の血が濃いから、きつと彼は優香よりも数百倍長い時間を生きることになるだろうよ。雲居がそうだ」

「雲居？」

数久の式神のことだ。蛇の妖怪だという彼女は、恐ろしいほど美しい女性である。

「雲居も一族の者だったりするの？」

「ずっと昔のね。彼女はもう800年以上生きているはずだ。系図のずつと上の方に名前が載っていた」

「名前、載っているんだ？」

「死産っていうことになっているけどな。それに『雲居』という名前では載っていない。『女子』って載っている」

「それ、名前じゃないじゃんか」

それでよく雲居のことだと分かったなと眉を顰めると、雲居本人が教えてくれたのだと、ゆずるは肩を竦めた。なるほど、と手のひらを打つ。

「けど、なんで雲居は数を選んだんだ？」

「そろそろ山から出たくなってきたところ、好みの顔をした餓鬼が目の前をてくてく歩いてきたんだろ？」

「てくてく……」

「純血の妖が妖魔界でどのくらいの寿命を持っているのかは知らない。だけど、ここにいるモノたちは人間の血も持っているわけだし、人間界のこの山だけの空間で暮らしているという負荷を考えると、他の妖に比べて長くは生きられないだろう」

もつとも、長すぎる時間を生きたいとは考えてもいないかもしれないと、ゆずるは言い加えた。

雲居たち、この山の妖怪たちは、己の親が死に、兄弟が死に、兄弟が生んだ子どもらまでも死んだ後もずっと生きていかなければならないのだ。人間の血よりも妖の血をより濃く持って生まれてきてしまったが為に。

「雲居の寿命はあと数十年で尽きるらしい。最後に山から出てみたいと思うのも、分かるだろう？ この山は安全だけど、静か過ぎるから」

「寒いし、な」

優香の兄も雲居と同じ生き方をするのだろうか？

優香が山にやってきたら、その前に姿を現し、彼女の式神となり、山を出る。

そうして、優香の死と共に山に帰って来、己の死期を悟り、山を出たくなった時、再び主を選ぶのだ。

頭痛。

だけど、大丈夫だ。我慢できない程ではない。

不意に、ゆずるが立ち止まり、直久を振り返った。

驚いて目を見開くと、ゆずるも驚いたようで、すぐにその驚きを隠そうとして目を逸らした。

「何だよ？」

「別に……」

それっきり口を閉ざすかと思ったゆずるだったが、ただ、と言葉を続けたので、直久は更に驚いた。

ゆっくりと歩き出す。

「ただ？」

「何かが後ろからやってくるな、と思ったんだ」

「後ろから？       それ、俺だろ？」

「うん。直だった」

「……」

変なことを言っているという自覚はあるようだ。直久に分かりやすく説明しようと、言葉を探して、顔を顰める。

「実際に振り返ってみたら直だったんだけど、直じゃなくて、もつと何か恐ろしいモノが後ろから追ってくるような気配がしたんだ」

「恐ろしいもの？」

「何だろう？ 暗い感じの……」

「暗い？」

「闇みたいなの……」

「闇？」

闇と言えば、辺りはずいぶん薄暗くなっている。  
正午前にあの途方もなく長い石段を上り始めた。あれからだいぶ時間が経ったように思う。

空を仰いだ。深緑。木々に覆われた頭上は、太陽の位置はもちろん、空の青ささえ分からなかった。

「まさか……」

ゆずるはずっと考え込んでいたらしい。ある仮定にたどり着いて、顔を青ざめる。

「直、気分はどうだ？ 何か変だって感じることはない？」

「変？ 変って言えば、さつきから変かも」

「さつきから？」

「さつきって言うか、ジジイが死んじゃった直後からかな。違和感って言うの？ 何か違うって感じ」

何が違うのかは分からない。

どこか。そう、どこか。自分の中のどこかがガラリと変わってしまっただような感じがした。

細胞が書き換えられてしまった。そんな感じ。

「お前、もしかして、あれ見えるか？」

空を指したゆずるの指先を直久は目で追う。何もない空間。

首を横に振ると、ゆずるはホッとしたような顔をした。だが、すぐに、あの音は聞こえるか、と言った。

「あの音？」

音なんて何も聞こえない。虫の声も、鳥の声も。木々のざわめき



さえも。

そう答えようとした時だった。

リン。

長く伸びる涼やかな音。風鈴を鳴らしたような音だ。

「聞こえるんだな？」

「……聞こえる」

言っと、ゆずるは表情を暗く沈めた。

嫌な予感がする。聞こえてはならない音なのだろうか。直久が眉を寄せると、ゆずるは低めた声で答えた。

「あの音は、鈴鳴りが足首に巻き付けている鈴の音なんだ。」

普

通の人間には聞こえない音だ」

## 5・いつたい直の中に何を封じたんだ？

いよいよ鈴の音が近付いてきた。道はわずかに広まった場所に行き着き、ゆずるは足を止めた。

薄闇の中、ぼんやりとした姿が見えた。

14歳くらいの少女。地べたに腹這いになり、上目遣いでジッとこちらを見ている。

タンポポ色の髪と同色の瞳が印象的で、ぼんやりとしか見えない直久の目にも、その色は鮮やかに見ることができた。

リン。鈴が鳴る。

「鈴鳴りっ」

リン！ 獣そのものの動きだった。伏せた姿勢から、あつと言う間に地を蹴り、ゆずるに向かって飛び掛かってきた。

直久はゆずるの躰を突き飛ばした。まさにその場所に鈴鳴りが着地した。

鈴鳴りは獣がそうするように、よつんばになり、頭をやや低くして二人を睨んでいる。

「なんで攻撃してくるんだよ！」

「鈴鳴りに言葉は通じないっ。式に下すのなら、力でねじ伏せるしかないんだ！」

ゆずるは立ち上がると、鈴鳴りを真っ直ぐに見つめたまま、空中に向かって腕を伸ばした。

「刀守り！」

白くぼやけたものがゆずるの手に集まってくる。やがてそれは細長い物へと変化していった。

刀だ。

飾りけのない刀が、鞘のない剥き出しの状態でゆずるの手に現れた。

ゆずるが刀を構えると、鈴鳴りはますます身構えて低く唸った。地を蹴る。鈴鳴りの爪を避けて、ゆずるも地を蹴った。刀を振り落とす。

切るといふよりも、腹で叩いたという感じだった。

鈴鳴りの躰は弾かれたようになり、遠くの地面に倒れた。だが、すぐに起き上がる。

鋭い爪で地面を長く引つ搔くと、一度躰を低く沈めた。

来る！

思った時には既に鈴鳴りの躰は空に浮いていた。避ける。避けきれずに、着物の袖が避けた。

ゆずるは舌打ちをして、拳を作った。

「火刈り！」

腕を伸ばし、作った拳を、ぱつと開いた。炎が鈴鳴りを襲う。

ライターの火のような小さな炎だったが、多くの獣がそうであるように、鈴鳴りも突如として目の前に現れた火を畏れているようだ。グツと怯んだ表情をする。

ゆずるは刀を振り落とした。ガツン。鈴鳴りの軽い躰が吹き飛ぶ。

「式になれ、鈴鳴り！」

這う幼い狼に向かって、ゆずるは声を張り上げる。

「俺を認め、俺に従えっ！」

リン。言葉を扱えないという鈴鳴りの代わりに答えたのは、彼女が左足首に付けている鈴だった。

先程の敵意剥き出しの表情が、うって変わって穏やかなものになっていく。

ゆずるはホツと息を吐き出して、彼女の前に膝をついた。柔らかそうなタンポポ色の髪に触れる。

ぐるる、と鈴鳴りは低く唸った。だが、それは頭を撫でられた心地よさを伝えるための唸り声だ。

直久はいつの間にか力を込めていた拳を解放すると、ゆずるの元

に歩み寄った。

「一匹ゲットって感じ？」

それにしても、力、使えるじゃんか」

「今はな」

けど、とゆずるは俯いた。

「さっきの炎が限界だ。あんな小さい炎しか出せないなんて、情けない」

「その刀は？」

「これは刀守りが守っている刀。九堂家の宝刀。神剣だ」

「それが使えるんなら、大丈夫なんじゃん？」

「この刀まで使えなくなったら、もうおしまいだ。戦う術がない」  
力でねじ伏せるしか道がない鈴鳴りと、まだ力が使えるうちに出会えたことは幸運だった、とゆずるは苦く笑った。

その通りなのだろう。だが、他の3匹がまったく戦わずに式神にできるかどうかと言うと、まだ分からない。力を失っている状態で、妖狼と対峙しなければならぬ時がくるに違いない。

そう思うと、今だけの幸運であるような気がしてならなかった。

カチャリ。ゆずるが刀を持ち直した音が響く。

薄闇の中、一点を見据える。鈴鳴りが顔を上げ、やはり一点を見つめている。

その表情は何かを待っているようでもあった。

「何か来るのか？」

「黒水だ」

薄闇に沈んだような黒い影。ほっそりとした長身の青年がゆつくりと足を運び、こちらに近付いて来ていた。

黒一色に見えた影は、近付いてハッキリ見えてくると、そうではないと知ることができる。

黒水の髪は黄土色であり、その眼は鮮やかに青かった。

「鈴鳴り、怪我はないか？」

黒水はゆずるたちには目もくれず、鈴鳴りに向かって腰を下ろし

た。鈴鳴りは言葉で答える代わりに、黒水が差し出した手の平をベロリと舐めた。

そんな彼女を立たせると、黒水は点検するかのように、彼女の腕を取り見回す。

この寒い山の中、鈴鳴りはタンクトップのような物に短パンという薄着をしていた。しかも、ボロボロに裂けているのだ。

服を好んで着る野生の獣はいない。鈴鳴りが服を嫌がるのは、彼女がより野性的である証拠なのだろう。

黒水は鈴鳴りの服を捲ると、彼女の脇腹を見やった。青あざができていた。

さすると、痛いというように低く唸る。膝にも擦り傷。右手の中指の爪が折れている。

「日暮らしの元へ行つて、手当を受ける」

言つと、さあ行けとばかりに鈴鳴りの背を乱暴に押しやる。

リン、と彼女の足首に付いた鈴が鳴る。何か物言いたげに黒水を見上げる。

だが、彼女は言葉を話せない。妖として知能が低いせいだ。

味方が敵か、従うべき者が否か。彼女に分かることはそれくらいなのだ。

鈴鳴りの鈴が鳴いた。黒水の言葉に従うことにしたらしい。リン、という音を響かせて、闇の中に去っていった。

後ろ姿を十分に見送ってからだった。黒水がゆっくりと振り返った。

ズンツと空気が重くなる。 いや、違う。 霧が出てきたのだ。

まとわりつくような霧は、ゆずるたちの服を湿らせる。動きづらさに不安を感じたのだろう。直久がゆずるを振り返ってきた。

「これは、力でねじ伏せないダメだっていう状況か？」

「……」

答えず、黙って刀を持ち直すと、離れていると手だけで直久に合

図をした。

黒水は水を操る妖狼だ。相手が水なら、火刈りの炎は使えない。水に対抗できるものは。

黒水が両手を同時に振り上げ、振り下ろした。 ゆずるは頭上を見やる。

氷？ 違う！水だ！

細い針のような水が何千本もゆずるに向かって降り注いできた。

「迷い土！」

ダン、と両手を地面に着く。地面が盛り上がり、ゆずるをカプセルのように覆った。

水の針が土の盾に弾かれていく。とりあえず息を付いて、黒水を見やった。

「え？」

いない！

いると思っていた場所に、黒水の姿はなかった。慌てて辺りを見渡す。

いつの間にか太陽は地平線に沈んでしまったのだろうか、暗闇に包まれていた。

どこだ？

ガツン、と衝撃を受け、一瞬気を失いかけた。いや、地に倒れているところを見ると、一瞬でも気絶してしまったにちがいない。

すぐに立ち上がろうと手足を動かしたが、何か重たい物で押さえ付けられているようで、ぴくりとも動かなかった。

「ゆずる！」

直久の声が聞こえて、咄嗟に風通いの名前を呼んだ。

鋭い風の刃が何かを切り裂いた。自由になった瞬間、何かを裂けて横に転がった。

その直後、ゆずるが転がっていた場所に水でできた太い槍が突き刺さっていた。

びしゃん、と音を立てて槍は形を崩し、水たまりを作った。ゆず

るを拘束していたものも水だったらしい。一瞬だけ縄の形をした水を見ることができた。

水か。

厄介だと、しみじみ思う。

水は量が多ければ重さを感じるものだし、その水圧によっては金属さえ切れることもできるという。

ウォータージェットという、今のこの状況では思い出したくもない名詞を思い出して、ゆずるはうんざりする。

迷い土の防御壁ならば防げるかもしれない。だけど、迷い土を呼ぶだけの力が、今のゆずるにはない。先程の彼女の力の一部を借りて作った盾だけで精一杯だ。

あの程度の盾が黒水のウォータージェットに勝てるかどうか、甚だ疑問である。

「先見。黒水が次に攻撃してくる場所を教えろ」

わずかに光る場所があった。ゆずるの胸あたりだ。

転がるように移動すると、次の瞬間、その場所に水の槍が突き刺さっていた。

「次は！？」

再び光る。逃げる。

「次！」

幾度か黒水の攻撃を避け続けていると、黒水は焦れたように顔を顰めた。

ゆずるに槍を放つことに夢中になっている。

今だ！

黒水の背後に回り込むと、その背に刀を突き付けた。

「お前の負けだ。大人しく式になれ！」

くつくつと、黒水は低く笑った。

「俺はお前の父親とも契約しているが？」

「二重契約は普通だろ？」

「お前が気にしないというのならば、俺はどうでもいい」

「……」

ゆずるはわずかな間を作った。

「俺とあいつ、どちらがよりお前の主に相応しいか比べているのか？」

「比べるまでもない。お前の父親は、もはや式としての俺は必要としていない。あいつの妻は鬼だ。鬼の力に頼るあいつに俺が力を貸す義理もない。だが、契約は契約だ。あいつの死後、あいつの

肉を喰うために、あいつが呼べば俺は駆け付けなければならない」

それでも構わないかと、黒水は笑みを引つ込めて言った。

「構わない。きっとあいつはお前を呼ぶことはもうない。だが、俺にはお前の力が必要だ」

「……いいだろう」

ポタリ、と耳の奥の方で水音が響いた。それが契約の証なのだろう。ゆずるはホツと肩の力を抜いた。

黒水が日暮らしの元へ案内すると言って、先を歩いている。

闇は確実に濃く深くなっていて、踏み締める地面の色と闇の色の区別が付かなくなっていた。

足の裏の感触だけで、落ち葉を踏んだことを知り、また小石を踏みつけたことを知るような歩みだった。

だが、不思議なことに、黒水の回りだけは淡く明るい。輪郭が白くぼやけて見えるのだ。

やはり人ではないからなのだろう。彼の足下だけはハッキリと確認することができた。

黒水と距離を置かず歩くと、幾分か歩きやすいことに気付いた二人だったが、人でないモノの歩みは早く、しかも、平坦な道だろうと坂道だろうと関係ないらしい。



幾度も小走りをしながら後を追う。

しばらくして、古びた庵が姿を現した。

いかにも隠者が棲んでいそうなつくりで、中から骨と皮だけの仙人が現れたとしても、そう驚かないだろう。

黒水が足を止めたので、二人も庵の前で立ち止まる。ギイイ、と耳に五月蠅い音を立てて動く引き戸が完全に開くのを待った。

戸の隙間から見えた庵の中は暗闇だった。

奥などない 黒いだけの平面のようにも思えたが、どこまでも壁のない空間のようにも見えた。

闇の中から、二つの瞳が光って見え、直久をギョツとさせる。

ゆずるは承知していたようで動じなかった。ジツと何者かが外に出てくるの見守っていた。

「このようなところまで、ご足労頂き、ありがとうございます」

落ち着いた声だった。闇を化粧しているかのような肌をした青年が声と共に、ずっと頭を下げた。

髪は肩までの長さで直線に切りそろえられている。

紺色 いや、紫色の直衣を着、まるで1000年の時間を止めてしまったかのような存在を二人の前に示した。

「日暮らし」

ゆずるが青年の名を呼ぶと、青年はフツと微笑んだ。そして、ゆずるとは別の方 もっと左方を見やり、声を放つ。

「これ、火刈り。そこにいるのであろう。我らにとって大切な方はずぶ濡れですよ」

すると、そちらの方から明るい声が返ってきた。

「だって、頼まれてない！」

頼まれてもないのに九堂家の者の世話を焼くのは、刀守りくらいだと、頬を膨らませ現れたのは、赤毛の少年だった。

いつからそこにいたのだらう。こんなにも側にいながら、まったく気が付かなかった。

ゆずるは下唇を噛み締める。月が南中する時刻が迫っていた。

「火刈り」

日暮らしに促されて、火刈りはゆずると直久に向かって、軽く二回、指を鳴らした。それだけで、黒水の霧と水ですっかり濡れてしまった二人の衣服は乾いてしまう。

「そら、できた。これで文句はないだろ？」

「お前も相当素直ではない。次代殿が心配で今までずっと後を付いてきたのであろうに」

「え？」

驚き、振り返ると、日暮らしは眼を細めてゆずるに頷いた。

「あちらを」

日暮らしは手にしていた扇で、ゆずるの後方を指し示した。

暗い森の中、淡く光る存在たち。

木の枝に腰を掛け、こちらを不敵な笑みで見つめているのは、先見。

焦茶色の腰まである長い髪。鈴鳴りのように薄着で、タンクトップのような物を一枚身に付けている。

ただし、下は短パンではなく、黒いジーンズ。

その木の幹に寄り掛かるように立っているのは風通いで、こちらは常磐色の狩衣を着ている。

彼の回りだけ風があるのか、銀髪がわずかに揺れ動いて見える。更に目線を移動させていくと、袿を身に付けた女の姿が見えた。

黒髪は闇に溶け、そのため色の白い顔が浮き出て見えた。美しい女だが、その隣に立つ女の美しさは明らかにこの世のものではない。

透き通るような肌に、やはり透明度のある青い瞳。風通いのように銀髪だが、やや紫かった細い糸のような長い髪。扇で顔を半分隠しているのが救いで、おそらくその顔を直視してしまった人間は魂を奪われてしまうに違いないと思われる程の妖艶さである。

先の女が刀守りで、もう一方が迷い土。

二人とも平安時代の貴族の女性のような装いをしているが、迷い土が身に纏っているのは、裳唐衣姿だ。

後世では、十二単とも呼ばれているものである。

刀守りよりも重ねている着物の枚数が多いのと、裳という後方に引きずるようにある物が迷い土には付いているという点が、目立つて異なっている点である。

9匹の妖狼たちは平安時代の生まれなのだということを考えれば、彼女たちのような装いは何らおかしいところはない。むしろ、現代人っぽく洋服を着ている先見や黒水の方に違和感があるのだ。

だが、時間の流れを無視し切った姿には、ドキッとさせられる。仲間を順繰りと見渡して、日暮らしが口を開いた。

「これで朝霧を欠いた8匹が揃ったわけです、次代殿。わたしは彼ら7匹を従え、この庵にわたしを尋ねに来た者に従うと決めています。そして、あなたは来て下さった」

従いましょう、あなたに。

言って、日暮らしはゆずるに向かって、再びゆつくりと頭を下げた。

刀守り、先見、風通い、迷い土、火刈り、鈴鳴り、黒水、日暮らし。8匹の妖狼たちと向かい合いながら、ゆずるは己の両手を眺め下ろした。

広げた両手の中に、淡い8つの小さな光。妖狼たちとの契約の証である。

死を迎えた時、己の血肉を与えるという内容だが、そうして九堂家の者の遺体が残らないことに慣れているゆずるにとって、それは大したことないものだった。

もともと死んだ後のことだ。自分には必要のない肉体のことをどうこうされようと構わない。

妖狼たちが喰わなければ、火葬場で焼かれるだけのものなのだ。グツと両手を握り締める。

残すは、朝霧。

けして小夜以外の者は主と認めない9匹目の妖狼。小夜と兄妹のように育ち、小夜に主従を越えた想いを寄せていた妖だ。

不意に、日暮らしが片袖を上へと持ち上げた。見上げると、彼の真上だけ木々の穴があき、ぽっかりと空が見える。

やはり、とゆずるは思った。

日暮らしの真上　木々の穴に丁度月が納まった時が、今夜の月が南中した時なのだ。

青白い光に透かされて、重なり合う葉の一枚一枚が浮くように見えた。その時が近いのだ。

やがて、穴の端に月が顔を覗かせた。

月の光は注がれるものであるのに、ゆずるの力はその光に逆流していくように、躰から抜けていく。まるで月が吸い取っているように。

月が納まる。

夜空の一番高い位置から、力を完全に失ったゆずるのを静かに見下ろしている。

だが、それも一瞬。月はけして留まらない。再び穴から去っていく、今度はゆずるに力を返すように光を注いでくる。少しずつ、少しずつ、躰に力が戻ってくる。

しかし、それは、朝露に濡れた葉の雫を、空ビンに一滴一滴集めているようなじれったさだ。

その空ビンが満タンになるまでには15日かかる。朔の日。光を放たない月が南中する時刻に、ゆずるの力は満ちるのだ。

ゆずるは両手を開き、眺める。

力を使えない状態で、果たして朝霧を式神にすることができるようだろうか？

例え使える状態であっても、孤高の妖狼を下すのは不可能のように思えた。

だが、やらないわけにはいかない。

九狼にならなければ、何の為の今までの人生だったのか。それに何より自分を信じてくれる人たちがいるから。

山頂を直指そうと、直久に振り返った。その時。直久の躰が傾い

た。

聞こえたか聞こえないかの呻き声。

地に沈んだ軀を、不思議なものを見るかのようにゆずるは見つめた。

さつと血の気が引く。

予期していたことだった。そして、できれば避けたかった事態だった。

「直！」

直久に駆け寄り、軀を揺さぶる。意識がなく、ピクリとも動かない。

「すぐに封印を」

「無駄です。すでに遅い」

慌てて直久の額に手のひらを置いたゆずるに、日暮らしが静かな口調で諭す。

「妖化が始まっています。見たところ、これは今に始まったことではありません。ずっと以前から、少しずつ……」

「妖化！？」

なんだ、それは、と悲鳴のように聞き返すが、答えは得られず、代わりに口を開いたのは黒水だった。

「丁度良いのではないか。山頂まで行く手間が省けて。彼奴がその人間の中から出てくるのを待ったらいい。それに山頂に行ったところで、彼奴は社から出てこないかも知れないぞ。それよりも、その人間の中から出てきたところを捕らえた方が確実だ」

「だけどさー。俺としては、直久が死んじまうのって、つまんだよなあ」

「先見は、そうだろうな」

「うんうん。俺ってば、こいつがすっげえチビだった頃から知っているんだよなあ」

残念そうに先見は直久の青白い顔を上から覗き込んだ。しかし、と言ったのは迷い土である。

「あの時、敬一があのを封じなければ、とうに死んでいた存在じや」

敬一とは、ゆずると直久たちの祖父の名前である。ゆずるは次第に冷たくなっていく直久の軀を抱えながら、迷い土に振り返った。  
「俺はあの時のことをあまり覚えていないんだ。記憶がない。俺のせいで直久がこうなってしまったのだということは知っている。だけれど……」

そうなのだ。

一族の中唯一人、まったく力を持たない直久は、先天的に力を持つていないわけではない。実は封じられているだけなのだ。

これはゆずる自身と祖父、そして直久の両親のみが知っていることだ。

直久の体内に、彼の力と共に封じたモノがある。

封印は祖父とゆずるが施した。祖父の封印は強固のものであったが、ゆずるの封印は月の満ち欠けによって強まったり弱まったりするものだ。

だから、時より、直久は人であらざるモノの姿を見たりしたのだ。

寒椿の咲く山の、あの冬の終わりの出来事の時がそれだ。そして、蜚の住まう家のあの時も。

弱まったゆずるの封印から漏れ出た直久が持つ本来の力がそれらを彼に見せたのだ。

祖父が死んだ。祖父の封印を失い、ゆずるの封印さえも弱まっている今、直久の力の解放と共に、彼の中のモノが動き出したのだ。

「お祖父様は、いったい直の中に何を封じたんだ？」

「朝霧ですよ、次代殿」

日暮らしがようやく答えた。ゆずるは驚愕する。

「朝霧が直の中に？　だって、朝霧はこの山の頂上にいるはずでは……」

「正確に言えば、封じられているのは、朝霧の一部です」

分からないという顔を見ると、日暮らしの言葉を迷い土が継いだ。  
「あの者は我らと異なつて人の血肉を食す機会がない。何も口にせず生きていられるモノは妖怪の中にも存在するわけがなく、確かに木の実なども腹の足しにはなるが、やはり血肉を食したくなる時が来る。そのような時に運良く、この山に迷い込んできた愚かな人間がいれば良いが、そうでなければ仕方がない。小夜の子孫と謂えども、背に腹は変えられない故な」

九堂家当主の死後その死肉を食べられる8匹の妖狼は良い。問題はそれを拒み続けている朝霧のことだ。

つまり、7歳になつて式神を得ようと山に入ってくる九堂家または大伴家の子どもを食べるしかないという話である。

「彼奴が腹を空かせている時に運悪く山に入ってきたのは、次代殿、あなただった」

「ただ、次代殿を喰われるわけにはいかない。俺たちはあんたを守るために朝霧と争つたんだ」

「だが、遅かった。いや、危うく間に合つたと言うべきか」

「あんたは喰われてはいなかったよ。ただ、朝霧は人間を人間のまま食すタチじゃなかったんだ」

「人間嫌いな彼奴は、人間の血肉を喰わねば長い時を生きられない身でありながら、その血肉を己の体内に入れることを忌んだ」

「ならば、人間でなくせばいい」

「そう、人間でなくせばいい。妖にしてしまえばいい」

妖に、と言つたのは風通いだ。それが妖化だと説明したのは、先見の方。

「己の力の一部を獲物の体内に送り込んで、精神面から徐々に喰い殺していくやり方さ。心を失つた人間は、その身を朝霧に乗っ取られるんだ」

「次代殿。あの時、朝霧の力はすでにあなたの心を蝕んでいた。わたしたちはすぐに敬一の元へとあなたを運び、このままではあなたが失ってしまうことを告げた。しかし、方法がないわけではあ

りませんでした」

「あんたの力ごと朝霧の力を封じてしまえばいいってわけだ。だけど、敬一はあんたが大切だったんだ。あんたがその直久のよ  
うに、ただの人にしてしまうのを惜しんだ。だから、代わりをあん  
たに選ばせたんだ」



## 6・そいつらを異形と言うのなら

苦しくて、堪らない。朦朧とする意識の中、誰かが叫んでいる。誰かが手をきつく握る。名を呼ぶ。繰り返す。選べ、と言う。

選べ？ 何を！？

重くのし掛かってくる闇を押し退けるように、瞼をこじ開ける。「ゆずる、選びなさい。選べねば死ぬぞ」

死ぬ？ いったい誰が！？ まさか、自分が？

ぼやけた視界の中、祖父の顔が見えた。そして、遠くの方に二人の姿も見えた。

ゆずる、と祖父が枕元で強く呼ぶ。

どうして、と思う。

どうして、こんなにも祖父の顔がぼやけて見えるのだろうか。

息が苦しい。全身が汗でグシャグシャに濡れていた。

「ゆずる！」

促されて、ゆずるは鉛のような腕を持ち上げた。

二人 双子の従弟たち。

祖父は彼らのどちらかを選べと言っているのだ。

指先が震える。

苦しい。死にたくない。

死ねばラクになる苦しみを抱えながら、死にたくない、だけど苦しみからも逃れたいという矛盾を生み出す。

矛盾は混乱を招き、訳の分からない状態で、祖父に促されるまま指の震えを必死に抑え込んだ。

ハッと、ゆずるは顔を上げた。

あの時だ。朦朧とした意識の中、確かにゆずるは直久を選んだのだ。

そうして、後々になってから、意味も分からずに彼を選んでしまったことを後悔した。

だが、例えあの時、選ぶという意味を知っていたとしても、直久ではなく数久を選ぶことはあっただろうか？

否。ゆずるが数久を選ぶことは、あり得ない。直久以外の誰も選ぶことは、あり得ないのだ。

そう例えば、彼を選んだことで、彼が自分を厭うようになったとしても。

直久が本家を嫌うのは、本家の結界を彼の中に封じられたモノが厭うからだ。彼が祖父を煙たがるのも、ゆずるを嫌うのも、同じ理由。彼の中のモノが、己を封じた者を覚えているから。

祖母が直久を遠ざけるのは、彼女に流れる妖怪の血が直久の中のモノに恐怖しているから。

直久の中のモノ。

それは朝霧の、人間を妖怪へと変化させようとする力。

ゆずるは直久を見下ろした。もはや生きた人間ではありえない白い肌。髪は徐々に伸び広がり、変化していく顔は直久ではなくなっている。

朝霧。彼なのだ。

ゆずるは直久の躰から離れると、その瞼が開くのを待った。

待つと言っても、それは数秒の時間。瞼は開かれた。紫色の瞳がゆずるを映し出すと、ゆっくりと起き上がった。

黒かったはずの直久の髪も、いつの間にか、紫に染まっている。

そして、直久よりも大人びた顔が辺りを見渡して、嫌そうに顔を顰めた。

「これは、嫌な場所に出てきてしまった感じだな」

「朝霧」

「日暮らしか。お前がそいつらと俺の獲物を攫ってくれたあの時以来だな。獲物と言え、こいつがああ時のあのカキか。小夜の血を引きながら、小夜に少しも似ていない。もう少し大きくなれば小夜に似てくるかと思っていたが、やはりそのようなことはなかったな」

こんなことならば、あの時に喰っておくべきだった、と嗤った。

「女の身で九狼になろうとしているらしいな」

「なぜ、それを……」

「小夜でもなくせに」

朝霧はけしてゆずるとは目を合わせなかった。人間嫌いの為か、小夜の血を引きながら彼女に似ていないゆずるを見たくないのか。もしかして、とゆずるは朝霧を見やった。

「女が九狼になれないのは、お前がそれを許さないからか？」

小夜以外の主は認めない。小夜以外の女の九狼は認めない。

そうだとしたら、ゆずるが九狼になるために朝霧を式神にすることは、不可能な話ではないか。

朝霧はくつくつと嗤った。

「その通りだ。当然ではないか。なぜ小夜以外の者が『九狼の巫女』と呼ばれるようになることを許せると言う？ 男でも許し難い。だが、男ならば『巫女』にはなり得ないからな」

まだ我慢できると、やはりゆずるを見ずに言い放った。

「女のお前が『九狼』の名を継ぐくらいならば、あの鬼子が継いだ方が断然ましだ」

「朝霧！」

日暮らしが荒げた声を上げる。先見も頷いて、朝霧を睨み付けた。

「俺は嫌だぜ、鬼の子なんて」

「ならば聞くが、鬼が妖とどれほど違うと言う？ 妖狼と妖狐ほどの違いしかないと、俺は思うが？」

「いいや。まったく違うもんだ！ 鬼は人間の負の感情が生み出

した異形のモノだ」

「……なるほど。ならば、言い換えよう。半妖であつた小夜の血を引いたその子孫たちは、『異形のモノ』とは言わないのか？ 人間であるはずがなく、妖とも言い難い」

朝霧はゆずるを顎で指す。

「そいつらを異形と言うのなら、同じ異形のモノである鬼に等しい。だから俺は言うのさ。 そいつが九狼を継ぐくらいなら、あの鬼子が継いだ方がまだ、と」

鬼と等しい。ゆずるは唇を噛み締めて、揚々と語る朝霧を睨んだ。黙り込んでしまった先見に代わって、刀守りが静かな声を響かせた。

「妾はずっとゆずる殿を見守ってきました。ずっと……。誕生した瞬間から、今まで。 突然現れた鬼子を主と認めると言われても、妾たちは納得できません」

「納得しろよ、そのくらい。第一、鬼子の存在を今の今まで知らなかったお前たちが悪い」

「……言われることはもつともですが、しかし！」

「俺は、そいつを認めない！」

誰が何を言おうと、決めてしまったことは覆らないのだと言つばかりに、朝霧は言い切った。

その他の者を突き放したような言い方に、誰もが怒りを感じた時だった。 どのとも分からないところから、不意に声がした。

驚いてゆずるは辺りを見渡す。 声は朝霧が発したもののように聞こえた。 そのようなはずはないのに！

「黙れ！黙れ！黙れ！」

今度は確かに朝霧が口を開いて言葉を放つ。

「お前は死んだはずなのに。 お前の意識はすでに消え失せたはずなのに」

「直？ 直なのか？」

「黙れーっ！……ぐふっ」

口元を抑え、朝霧は前屈みに倒れ込んだ。吐き気を耐えるような呻き声を繰り返すと、すっと肩の力を抜き、ゆっくりと上体を起こした。

「直？」

もはや朝霧の顔はしていなかった。髪の色は黒に戻っている。やがて瞳に生氣の色が宿る。

とたんに直久は立ち上がり、空を睨んで声を張り上げた。

「てめー。勝手なことを言いやがって！小夜が何だつて？ 小夜に似てる似てないって、そんなに重要かよつ。 てか、ゆずるに何の文句があるつーんだよ！！」

「直……」

啞然としながらも、直久が睨み付ける先に目を移した。

すると、そこには直久の躰から弾き出された朝霧が空中に浮きながら胡座を掻いていた。こちらも啞然としている。

「確かに食い尽くしたはずだ。完全に俺と同化したはずなのに……」

「小夜小夜小夜ってな。そんなに小夜が好きなら、こんな山の大奥に籠もってねえで、捜せばいいだろう。小夜をさ！ お前、何百年も生きているんだろ？ だったら、小夜の生まれ変わりを捜せばいいじゃんか。小夜の魂を捜してやれよ」

人は転生するものだ、と鈴加が直久に教えた。本当にそうだとしたら、小夜もどこかで生まれ変わっているかもしれない。

「そんなに小夜が好きなら、小夜に会いに行けよ。こんなところに籠もっていたって、この先何百年経ったって、ずっと辛いだけだ。ずっとずっと寂しいだけだ。 探せよ。小夜を。この山から出てこいよ。俺も一緒に捜してやるからっ」

だあーっと一息に言葉を吐き出すと、直久は力尽きたように膝を折った。両手を着いて、肩で息をする。

今頃血の気が引いたのか、顔が青ざめている。だが、それでも、朝霧から目を逸らさなかった。

「小夜を捜す……？」

ポツリ、と朝霧が零した。

「考えてもみなかった。小夜も転生をするのか……」

「転生した小夜はもうお前の知っている小夜じゃないかもしれない。だけど、魂は前世の記憶を持っている。同じことを繰り返すんだとよ。だから、きつと、小夜の魂は、再びお前と出会っことを待っているはずだ」

そして、朝霧はその魂を再び愛することになるはずだ。

言って、直久はガツクリと頭を下げた。倒れそうになる躰を、ゆるるが支える。

「あ、ゆずる。うわっ。なんか、めっちゃ久し振りいゝ」

「バカ言え！ ほんの数十分、意識がなかっただけだろ」

「え？ マジ？ おれ的にはあゝ、数百年くらい眠っていたカンジ」

「大げさな……」

「けど。まあ、またゆずると出会えたし、俺って幸せ」

ギョツとゆずるの細い躰を抱き締めて、直久は笑顔を浮かべた。だから、と朝霧を見やる。

「だからさー、お前も幸せを掴みに行こうぜ」

ほら、と直久はゆずるを抱き締めるのは片腕に任せ、もう一方を朝霧に差し出した。

## 7・とりあえず婚約する

嫌な夢を見ていた。

それはずっと昔の出来事を思い出すような悪夢だった。

狭く暗い場所に隠れた女を捜して、村中の男たちが荒い声を張り上げる。やがて日が暮れ、暗闇が彼女を逃がしてくれるはずだったが、男たちは松明を片手に彼女の隠れる場所へと迫ってきた。朝霧が言った。

あの人間たち全員を喰い殺してやる、と。

だが、彼女は首を横に振った。そんなことをすれば、彼女は己自身を人間の仲間だと言い張ることができなくなってしまうと答えた。

朝霧は納得できなかった。なぜなら、彼女を追う者たちは、すでに彼女を人間だとは認めていないからだ。

人間が持つはずのない力を持った彼女のことを、他の人間たちは初めこそ重宝がり巫女として崇めたが、しだいに恐れを抱き始めたのだ。

異質な存在を忌んだ人間たちはまず、彼女を都から追い出した。

東の地へと逃げ延びた彼女はそこで隠れるように暮らしていたが、その暮らしは長くは続かず、どこへ逃げても人間たちは彼女を追いつけた。

彼女がこの世のどこからも姿を消してしまうまでは、安心できないと言うのだ。

人間相手ならば、例え何十人いようと、朝霧には塵に等しかった。

殺すことくらい容易いことだ。

そう彼女に言っていると、彼女は困ったように顔を顰め、印を結んだ。暗闇が朝霧を覆う。

封印されたのだと気が付いたのは、すでにその封印が解けた後だ

った。

誰もいない。

彼女が隠れていたはずの小さな庵も、何もない。

ただ広がる草原。

空。雲。風。

ひたすら何年もそこで立ち尽くしていると、ようやく何者かが歩み寄ってくる気配がした。

日暮らしだった。

小夜が死んだことを、彼独特の静かな口調で語られた。

あの後、村の男たちに見つかり、捕らえられたのだ。

半妖だった彼女は首を絞めても死なず、刃物で突いても死ななかつたという。

半年間に及ぶ拷問の末、半ば諦めた村人たちは、村はずれの小屋に幽閉することにした。

そして、それから更に数年後、村人は彼女の下腹部が膨らんでいることに気が付いた。彼らが知らぬうちに、この小屋に賊が入ったらしい。

しばらく住処として使っていた痕跡があり、割れた酒瓶が転がっていた。

父親の知れぬ子を身籠もった彼女は、それから500日後、双子の男女を生んだ。そして、息を引き取った。

日暮らしの後ろに、刀守りと迷い土の姿が見えた。彼女たちはそれぞれ赤子を抱いている。

小夜の子かと思うと、胸の中を黒い渦が生まれた。何者かが小夜を犯したために生ませた子なのだ。

見知らぬ相手を憎むことは難く、目の前の子を恨めしく思うことは容易かった。

だが、何よりも憎むべきは己自身だった。



何もできなかった。

小夜が相手だったからとは言え、封じられている間にすべてが終わっているとは。

助けられたはずだ。小夜を。

ずっと一緒に笑って暮らせたはずだ。小夜と。

できなかった。

直久は夢を見ていた。

それはずっと昔の出来事を思い出すような悪夢だった。暗く重い、冷たい感情の渦がどろどろと蠢くような夢。朝霧の夢だった。

「直ちゃん！」

肩を越すくらいの長さまで伸びた直久の髪を発見して、数久は目を大きく見開く。だが、すぐに無事だったことを喜んでくれた。

明け方前、山から下りてきた二人を一族全員が迎えた。寝ずに待っていたのか、疲れ顔が並ぶ。

「それで、朝霧は？」

「他の8匹は式にしたようだが」

まず年寄りたちが進み出て、口を開いた。直久は肩を竦める。

「朝霧ならここにいるぜ。ここ」

眉を寄せる彼らに、直久は笑いながら己の胸を軽く叩いた。理解不能との表情を浮かべた者たちのために、ゆずるが口を開いた。

「直久が朝霧を式にしました」

「それは話が違う」

「そうじゃ、そうじゃ。違うであろうに」

口喧しく騒ぎ出した年寄りたちを黙らせるために、確かにと、ゆ

ずるは声を張り上げる。

「確かに約束を違えました。ですが、今から守ります。俺は いえ、わたしは直久と共に九狼を名乗っていきます」

「何？」

はあ、と振り返ったのは直久も同じ。初めて聞く言葉だった。

えーっと、それはつまり、どういうことだ？

答えを求めて数久を振り返るが、双子の片割れもあんぐりと口を開いていた。 ゆずるが直久を振り返る。

「わたしはその……。 お前が一族と同じ力を持たずに悩んでいたことを知っていながら知らないふりをしたり、そもそもそうなった原因はわたしにあるわけで……。 あの時、わたしが直を選ばなければ、直がそういう目にあうことはなかったわけだから、直がわたしを恨んでも仕方がないと思う」

何を言おうとしているのか、ゆずるは言葉を選びながら、辿々しい様子で話す。

「前に直はわたしをス……。 キ……。 って言ってくれたけれど、真実を知っても尚、同じことを言ってくれるのであれば、わたしの心はあの時に直を選んだ時点で決まっているのだから、わたしと共に『九狼』の名を継いで欲しい」

「え？」

言われた意味がサッパリ分らない。

直久は視線を泳がせる。眼が合うと、鈴加がガツと睨んできた。

貴樹はクスクスと笑い、数久はファイトと言わんばかりに両手を握り締めている。

だから、意味がワカリマセン。

「えーっと、つまり、もう一回、俺がお前のこと好きって言えばいいわけ？」

「……」

「……そういうこと？」

俯いてしまったゆずるの顔を覗き込む。 ゆずるはスツと直久から

顔を背けた。息を吐く。

「好きだ」

とたん、ゆずるは顔を上げた。

「なら、結婚しろ！」

「はあゝ！？」

「でないと、わたしは9匹の妖狼を手に入れたことにならない」

「げっ。そのために、そんなことを言ってるわけ？」

結婚だなんてとたじろぐと、後頭部を叩かれる。父、彰久だった。

「覚悟を決めろ、直久！男だろ！」

「へ！？」

「ゆずる、こんな息子で良かったら、リボンを付けて献上しよう」

「ありがとうございます」

「おい、コラ！……てか、俺、お前の返事聞いてないし！」

大声を上げると、ゆずるはいかにも嫌そうな表情を浮かべた。面

倒臭そうな顔で、何を言っているんだ、と言葉を吐き捨てる。

「お前よりわたしの方が先に、お前を選んでいる」

「は？ いつ？」

「7歳の時」

「覚えてねえーっ」

「でも、わたしはずっとずっとお前が……」

ハッとして、言葉を切るゆずる。直久は眉を上げた。切られてしまった言葉こそ、聞いたかった言葉だったらしい。

背を向けたゆずるを上目遣いで見やる。

「だけど、まあいい。長い時間共にいれば、いつかその口から聞けるかもしれない。」

「いいぜ。お前が俺を必要だっということには変わらないし」  
とりあえず婚約すると言って、ゆずるの顔を振り向かせた。

## 8・俺を見てくれない、お前が悪い！

もう帰って来なくていいぞ、という父親の言葉は、その口調とは裏腹に絶対命令だったらしい。

家に入れて貰えないので、本家に居候することになった直久は、以前は祖父の自室であったその部屋で横たわっていた。眺めるわけではなく、ただ天井を見つめる。

祖父とゆずるの封印が解けてから、直久にも人ではないモノたちが見えるようになっていた。

力も使える。数メートル離れた場所のペンを持ち上げることさえできるのだ。

朝霧の力を借りれば、もつといろんなことができる。

空を飛ぶことも。時空を越えることも。手のひらから炎を出すこともできたし、水を動かすことも、風を止めることもできた。

直久は天井から目を離すと、横目を流した。

「なあ、ゆずる」

同じ部屋の中にいながら、手の届く場所から離れた場所に座っているゆずるに声をかけた。ゆずるは本から目を離さずに、適当な返事をする。

そんなに面白い本なんだろうか。

「せっかくそこにいるんなら、ついでに膝枕してくんない？」

「なんで？」

「ついでじゃん」

寝転がっている直久と異なり、ゆずるはきちんと正座をして読書をしている。

本くらいもつと楽な姿勢で読めばいいものを。

だが、せっかく正座をしているというのなら、その膝に頭の二つくらい乗せさせてくれてもいいはずだ。

「嫌だ。重い」

目すら合わせてくれない。

こいつ、本当に俺のこと好きなのかよっ！

疑いたくなるが、疑いだしたら止まらなくなるのでやめておく。  
遠くの方で子どもの声が聞こえた。優香が友達を連れて遊びに来ているのだ。その中に太一が混ざっている。

太一はあれからずっと本家で暮らしている。妻との生活を邪魔されたくないと言って、浩一が本家に置き去りにしたのだ。

彼は再びどこかに消え去ってしまったので、追うこともできず、太一は本家にしか居場所がなくなってしまったのだ。

異母弟なのだ。それでなくとも同じように父親に捨てられたゆずるが哀れに思わないはずがなく、ゆずるは太一を本家に置くことに決めた。

鬼の血が混ざっていることを理由に一族の者は反対したが、ゆずるが当主なのだ、ゆずるが決めたことが覆ることはない。

ゆずるは九堂家当主になった。以後、『九狼』と呼ばれる。

だが、一つ条件があり、裏山の結界は彼女ではなく、彼女の夫となる直久が守り続ける。直久が彼女の側にいることが条件なのだ。

なあなあ、と直久は起き上がり、ゆずるの側へと膝で歩み寄った。

「なあ、ゆずる」

「ん？」

顔を上げない彼女にイタズラをしてやろうと、覗き込んだ。ちゅっ、と頬に唇をあてる。

「うわっ、何を！」

「おっ、やっとこっち見たな」

ニツと歯を見せてやると、ゆずるは怒って眉を吊り上げた。だが、顔は赤らんでいるし、瞳も潤んでいる。ぜんぜん迫力不足だ。

直久は声を立てて笑った。バコンツと後頭部を叩かれる。

「直！」

「痛いなあ。」

けど、俺を見てくれない、お前が悪い！」

「……」

ふいっと、そっぽを向いてしまったゆずるを振り向かせるために、再び声をかける。

「なあ」

「……」

「小夜、本当に転生しているよな？」

「……小夜？」

「ちゃんと捜してやらないとな。朝霧と約束したから」

そういう約束で、彼は直久の式神になったのだ。

直久に振り返ったゆずるが、こくりと頷いた。

「見つけよう、ちゃんと」

朝霧が人間を嫌うのは、人間が小夜を殺したからだ。

だが、小夜も半分は人間であり、小夜の子もその子孫達も人間として生きている。

彼らに奉られて朝霧は人間の世界にいるわけなのだから、彼の想いも複雑なのだろう。

山に籠もるより仕方がなかったのかもしれない。

小夜の子は、半分は小夜の血を、そして残り半分は小夜を犯した憎むべき人間の血を持っていた。

その子孫達に小夜の面影を求めながらも、小夜ではないと否定し続けていた。

矛盾。

混乱と苦しみの。

だが、もし小夜の魂を見つけたのなら、朝霧に何かが起こるかもしれない。

何か変化が。この九堂家にも。

ゆずるが自身の膝を二度軽く叩いたので、直久は再び寝転んだ。  
天井ではなく、ゆずるの顔を見上げる。

だが、すぐに、『うざい』というあまりにも冷たい言葉が降ってきて、顔の上に本を乗せられてしまう。

そんなことをされても、今の体勢に不満はなく、直久は安心した心地で瞼を閉ざした。

【完】

8・俺を見てくれない、お前が悪い！（後書き）

『風花』（<http://ncode.syosetu.com/n6813d/>）へ続く。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6763d/>

---

月読み

2010年10月8日14時56分発行